

医学部専門予備校 クエスト 解答速報

聖マリアンナ医科大学（医） 英語 試験日2月6日（木）



【講評】

マーク問題は易化したが、記述は難化した。特に[1]の[4]は簡単そうに見えてしっかり解答しようと思うとかなりの難問で、英語に自信のある生徒ほど不安を感じたと思う。自己採点できる箇所でも7割以上取った上で、勝負を決めるのは記述でどれだけ取れるかだ。後期も受験予定であれば、この大学の各年度の記述のある大問を解き添削を受ければ点数は今からでもかなり上げられる。

1

[1]

- (a) Yellowstone の草食動物たちが食べ物の減る冬を越す方法として提案されている、口に入る食べ物が豊富な時期にさまざま食べて栄養を蓄えておくという説と、実際に冬になって初めて捕食対象を広げて凌ぐという説は、互いに矛盾していること。
- (b) どのようにして Yellowstone の草食動物は年間を通して生き延びるための栄養を得ているのかという問い。

[2]

- (あ) GPS (い) bison, elk, deer, bighorn sheep and pronghorn antelope
(う) metabarcoding (え) fecal samples (i) b (ii) d

[3]

その土地における最も小型な種は夏に活動範囲を広げさまざま食べて蓄え、冬は安全なところに集まり、手に入るわずかな植物で凌いだ。一方比較的大型の種は冬特有の限られた捕食対象の奪い合いは避け、雪原に出て、小型種では取れない植物を食べていた。

【解説】

書くべき箇所はわかりやすいが、規定の文字数のために情報を切り捨てていくのが少し難しい。また、動物たちに比較表現 (smallest, larger) が使われていることにここで注目しておかないと、次の[4]が答えられなくなる。

[4]

どちらの説も正しいが、その地にその時期に存在する動物同士の相対的大きさ次第で、特定の種にとってどちらの戦力が最も適するかは変わっていく。

【解説】

一見簡単だが、かなり難問。本文の▶but in different ways and at different times で頭を抱えた受験生がほとんどだと思う。これは[3]の記述箇所と連動しており、「時期や時代が異なる (at different times) とその地に存在する動物種も変わり、それにより体の大きさを基準にした動物同士の力関係も相対的に変わっていくので、とある種においてどちらの理論が当てはまるかは、その変化に合わせて変わっていく」ということを伝えている。たとえば今回は恵まれた体躯を持っているとして扱われたバイソンも、より大きな動物種ばかりの環境になれば、今回の例におけるシカや羊のような生活を余儀なくされるのだ。試験時間内にここまで読み取って答えを仕上げるのは困難であり、落としてしまっても全く問題ない問題だと思われる。

[5]

この研究結果が環境保護に関わる人がそれぞれの草食動物種のために保護すべき植物対象をより上手い形で保護する助けとなり、それによってそれらの動物たちが年間を通して生き延びるための助力となること。

2

1.d 2.c 3.d 4.c 5.b

【解説】

4.の(c)vague については、本文¶5 の▶thought the false feedback was very accurate, especially when it was positive という記述を見て、消してしまったかもしれない。だがよく見てみると選択肢には「診断結果がポジティブなものであるときは、特にその曖昧な個性診断を信じてしまう」とあり、tend to believe の箇所が thought ~ accurate と一致するので実は正しい。accurate「曖昧な」などという記述は本文にはない、と思うかもしれないが、本文の information that applies to everyone「誰にも当てはまる情報」は誰にも当てはまる以上具体性をかいた「曖昧な」ものだろう。

3

I. 1.d 2.c 3.a 4.b 5.c

II. 1.f 2.d 3.b 4.i 5.h A. d